

テンカートール徳川吉宗

幼くから病弱でありました7代将軍家継が亡くなりました。老中たちは徳川御三家の藩主に登城を要請しました。

「尾州の徳川^{つぐとも}継友卿は藩邸から籠^{かご}に乗ってお城に向かいました。途中今井町を通ると鍛冶屋の^{つち}鎚の音のトッテンカンが“テンカートール”（天下取る）と聞こえました。

登城しますと既に水戸徳川^{つなえだ}の綱條卿と紀州徳川^{よしむね}の吉宗卿は老中と共に座っていました。

継友卿も着座したところで、老中より尾州継友卿に向かって“七代将軍ご他界し、お跡目これなく任官いたすべし”と先ず御三家筆頭の尾州継友卿に将軍就任を要請されました。

継友卿は御三家筆頭として当然自分が次期将軍と思っていました。

しかしここは古来からの風習にならい、高貴な官への任官要請は一回目は断り二度目の要請でお請けする段取りをふむことにしました。

“余はその徳薄くしてその任にあたわず”

当然二人共も継友が将軍任官と思っており辞退を確信していました。

次に水戸の綱條卿にも同じ要請があり、綱條卿は辞退されました。

三番目に紀州の徳川吉宗卿に同じ要請があります。

“余はその徳薄くしてその任にあたわず。しかしながらお二人が辞退されては将軍が不在となってしまう。任官いたすべし”

この返事を聞き継友も老中たちも一度は断るのが風習ではないかと驚きましたが、しかし今更そんなことは言えず、将軍は紀州の吉宗卿に決まってしまいました。

継友卿は何も言えません。

籠に揺られて藩邸に戻る途中同じく今井町まで来ると鍛冶屋がまだ鎚を打っており、そして真っ赤に焼けた鉄を水の中に入れて“キシュー”（紀州）」（紀州は吉宗）

これは落語の噺「紀州」です。

吉宗將軍誕生の実際のいきさつはどうだったのか、もちろん落語とは違うようですが、尾張（尾州）の藩主継友が本命ではあったようです。

將軍家も尾張・紀伊徳川家の後継も早死にが多く、養子が多く混み入っていますので、後掲しました「徳川吉宗関係系図」をご覧ください。

吉宗は紀州（紀伊國）55万石の二代藩主光貞の四男です。五代藩主です。

光貞の長男綱紀は三代藩主に就任後41歳で死没、男子なし、次男は夭折していました。後に三男の頼職よりもとが四代藩主就任するも又26歳で死没し男子なしです。

そして四男の吉宗が五代藩主に就任することになりました。

兄3人が死没し、いずれも男子ないため四男の吉宗が就任となりました。

藩主になって12年後に本家將軍家の七代家継いえつぐが8歳で亡くなります。

家継は生まれつき病弱のため不安で父親の六代將軍だった家宣いえのぶも後継に尾張（尾州）徳川の四代藩主吉通も考えましたが、新井白石の意見を採用して我が子の家継を指名して亡くなります。

幼少の家継は將軍に就任しますが病弱のため側用人の間部詮房、老中、そして家宣の正室天英院が相談して後見人を立てることを検討します。家継が亡くなった時は後継の將軍含みです。

候補者は4人です。

御三家から三人です。

尾張の継友：25歳、家康から5代、御三家筆頭、亡くなった兄の吉通は六代將軍から後継に推されたこともある

紀伊の吉宗：33歳、家康から4代

水戸の綱條：61歳、家康から4代（光圀の兄の子で光圀の後の水戸藩主）

当初天英院が推す家宣の弟で家継の叔父になる清武きよたけの名も出ましたが、越智家に養子に出ているとして候補から早々に外れました。

下馬評では御三家筆頭の尾張の継友で、本人及び家臣団も確信していたようです。

そして家継が亡くなるその日に、老中は御三家の上記三人に登城を要請し、後見人（家継亡くなれば將軍）を要請することになります。

このところまでは上述の落語と同じですが、後が違います。

5人の老中と御三家の尾張の継友、紀伊の吉宗、水戸の綱條が江戸城の部屋でそろいます。

直ぐに水戸の綱條^{つなえだ}が吉宗に後見役をお請け願いたいと下座に下がり頭を下げます。

5人の老中も同じく吉宗に上段の間を勧め後見役をお願いしますと。

吉宗は辞退します。

綱條より「それではお家が成り立ちません」と強く要請します。

この雰囲気の中で尾張の継友はもう自分がとは言い出せません。一緒に吉宗に頭を下げました。

吉宗が請けました。

家継はその日に亡くなり、吉宗は将軍に就任しました。

もうこれは事前に了解されており。知らぬは本命の継友だけの構図です。なぜこうなったのかです。

それぞれの関係者の思惑と吉宗の根回しが功を奏したと言われています。

6代家宣、7代家継の御側用人（老中格）の間部詮房^{まなべあきふさ}は自分が権力の中枢に居続けるためには本命の継友でなく二番目の候補の吉宗を推戴して吉宗に恩を売ります。

5人の老中には吉宗より譜代（現老中を）大切にするとの内意あり、大奥の天英院（家宣正妻）、それに家継生母の月光院に対しては大奥の経費はけずらないと、根回しがありました。

水戸の綱條は自分の家は御三家の三番目であるし高齢でもあるので辞退しようと思っていたところに、吉宗より請けたいので支援の要請があり。一方尾張の継友からは要請がありません。心証を悪くしたのです。

そしてお側用人の間部詮房、5人の老中、水戸の綱條が吉宗推戴、大奥の正妻、生母と将軍推戴に発言権を持つ関係者は吉宗推戴で一致しました。

知らぬは本命視されていた継友（その家臣団）だけです。

そして当日を迎えてしまったのです。

事前に自分を外す合意がなされていたことは継友も当日分かりました。藩邸に帰り重臣を集め、根回しをしなかったことで重臣を非難しました。重臣同士

の間でも非難のなすり合いでひどい有様だったようです。

家宣が自分の後に指名しようとした吉通（^{よしみち}継友の兄）は御三家筆頭の尾張家というだけでなく治政に優れ大変評判の良い人でした。

いずれは幼少で病弱の家継の後見人（亡くなれば将軍）との声がありました。

しかし家継が亡くなる前に食中毒で25歳で没しました。そばに医者が出たのに助かりませんでした。

将軍候補暗殺のうわさがたちました。

後は幼少の五郎太が藩主を継ぎましたが、まもなく没します。

その後は弟の継友が継ぎます。上述の通り将軍になれませんでした。

継友に男子無く後は弟の宗春がつぎます。

この宗春は吉宗将軍に反抗的で、ついには隠居、蟄居させられます。

兄の継友が順当に将軍になっておれば、その死後その子おらず自分が将軍になったとの思いがあったのでしょうか。

尾張徳川家が念願の将軍になれるのは14代家茂を送り出した時です。

さて吉宗を将軍に推戴した人たちのその後です。

お側用人の間部は罷免されました。吉宗は前々・前将軍の側近の実力者を排除しました。間部は自分の思惑だけで吉宗を推戴したのです。吉宗は配慮しません。

老中5人は残留です。推戴の恩にむくいました。

大奥の二人には引き続き丁重に処遇しました。

水戸の綱條へも丁重に接したでしょうが、従来通り御三家として処遇します。

吉宗将軍就任についてはあまりにもトントン拍子で奇異なところが多くどうしても因縁話になります。

吉宗が兄の外、関係者すべてを秘密裏に暗殺して将軍の座を獲得したとの妄説もあります。

吉宗将軍の治政については享保の改革で有名です。

別稿で記したいと思います。

以上

2024年4月14日

梅 一声

徳川吉宗関係系図

